

第2回魅力ある県立学校づくりアドバイザー会議議事録

1. 日 時 平成27年10月27日(火) 14時30分～16時30分

2. 場 所 教育委員会室

3. 出席者

小倉康委員、白水始委員、菊地美代子委員、野原晃委員、秋庭美智子委員、
永島宣幸委員、平野正美委員、岩崎利信委員、小玉清司委員、
櫻庭比呂美委員、関口浩委員、坂庭千絵委員

4. 協 議 「魅力ある県立学校づくりについて」

事務局	(資料2「魅力ある県立学校づくりについて」のうち、「県立学校の活性化・特色化」と「県立学校の教育環境の整備」について説明)
司会	本日議論していただく「魅力ある県立学校づくりについて」のうち、「県立学校の活性化・特色化」と「県立学校の教育環境の整備」について説明があった。五つの論点があるが、どこからでも結構なのでご意見をお願いしたい。
委員	<p>前回も申し上げたが、県立学校には現在の体制の中で様々な専門学科があるわけだが、中学生が進路を選択して進学する際、それぞれの学科に対してどういう将来のキャリアを実現するものかという具体的なイメージを持ってないまま進学しているという実態があるのではないかと思う。確かにそれぞれの学科に特色がある中で教育をしているわけだが、中学生に対して学校や学科の特色がもっと鮮明にアピールされるべきではないかと思う。</p> <p>どういう方向でアピールするかについては、中学生が自分自身の将来の夢とかキャリア意識といったものが未熟な中で、実感を持って理解できるようにすることだろう。そのためには、高校が具体的な教育プログラムの内容や、在校生・卒業生の様子などを具体的にアピールしていく必要がある。</p> <p>中学校では、生徒が在籍している間に自分自身の将来に向けての希望とか夢を明確にしていくようなキャリア教育を行い、それを進路指導に繋げて選ぶべき高校が見えてくるようにしていく必要がある。</p> <p>高校では、一人一人の中学生に対して、そのニーズ・必要性に応えられるとい</p>

	<p>うことを明確にアピールできる状況をつくり、その結果として、その学校に進学した際の満足度や、その学校を卒業した後の活躍の状況などが全体的に向上するようにならないといけない。これは従来から意識されてきたことだと思うが、現状では第一希望でない高校に進学したと思われる生徒が少なくない。普通科の中でも専門学科の中でも、データを見るとそう読み取れるところがある。それが一番の課題ではないか。</p> <p>今の学科の体制そのものを変えるというよりは、高校が中学生に対して分かりやすくアピールしていくと同時に、中学校は時間をかけて学科を選べるような進路指導をしていく必要がある。</p>
司会	<p>現在の学科を大きく変えるということではなくて、まずは今ある学科を中学生に良く理解してもらい、中学校でキャリア教育をしていく中でそれぞれの学科の特色や魅力を伝えていくことが大事ではないかということか。</p>
委員	<p>それが基本である。さらに人材育成という点では第一回の会議でも議論があったが、その点についてはさらにもう一段階進めて、それぞれの学科の特色と育成できる人材について、今までよりも明確にしていく必要がある。</p>
	<p>中学生が明確に夢とか目標とかを持っているときには、高校はそれを実現するという事に集中すれば良い。これが人材育成という観点では理想的である。そうした中学生に対しては、高校が科学技術に長けた人材、グローバル人材、産業界のプロフェッショナル、地域を良くする人材など、ある程度の育成したい人材とそのための有利なプログラムを明確にしていれば、中学生の目標とのマッチングが図れるのではないか。</p> <p>現状では、多くの中学生はそこまで夢や目標が明確でない中で高校に進学し、高校在学中に将来の進路を決めていくという場合が多いのではないかと思うが、そうした中学生に対しても、高校が今アピールできる特色を分かりやすく伝えることで良いのではないか。</p>
委員	<p>私は普通科高校勤務なので専門高校に詳しくはないが、産業構造の変化に伴って未来思考というか今後の将来に向けて専門高校がどうあるべきかについて見直す時期が来ていると思う。</p>
	<p>中学校と高校の進路指導の体制だが、高校の方はオープンで門戸を開放して、各学校あるいは各地域での大きな取組も含めて、様々な形で学校説明会を実施している。しかし、実際には中学校3年生の段階で7割くらいの生徒が塾に通っており、塾の指導を受けて学校の選択を行っている場合が多い。高校が偏差値で輪切りにされて選択される中で、塾に通っていない中学生が、専門高校を選ばなく</p>

<p>委員</p>	<p>てはいけない状況もなくはない。そういった中学生やその保護者は、高校の説明会にも参加していないような状況もある。</p> <p>そういった中で、専門高校がその良さを中学生にわかってもらうためには、中高連携が重要である。先程専門高校の就職実績を示していただいたが、中学校の先生方はそういった実績も分かっていらっしゃらないのではないか。こういった勉強を行っているかも分かっていない。高校の方もオープンにして色々やっているの、専門高校への進学を考えている中学生や保護者が参加してくればいいが、なかなかそういう状況にない。</p> <p>塾に指導されると、偏差値で判断して普通科に行く場合が多いので、塾に通っていない3割の中学生の中に専門高校に進学する生徒が多いということになる。そうすると中学校の先生に指導していただくしかない。中学校の先生方は、地域の専門高校も含めて、高校についての知識を蓄積していただきたい。そのシステムとして、例えば、初任者研修や年次研修で、夏休みなどの長期休業中に一日でも二日でもいいので地域の学校を数校回ってレポートにまとめて各学校のデータとして蓄積していくようにしたらどうか。中学校の先生方に工業高校はどういったことをやっているのかを見ていただくなど、専門高校の実態を知ってもらった上で進路指導をしていただくことが大切である。</p> <p>中学校の教員は、100%近くが普通科高校を卒業して大学に行き、教員になっている。私はたまたま若いころ、工業高校に一日、商業高校に一日、農業高校に一日行くという機会があったが、中学校の親御さんたちは極端かもしれないが、農業イコール田んぼ、工業イコール機械、商業イコール簿記という認識しかないように思う。ところが今は農業にしてもバイオなどがかなり進んでいるし、工業にしてもかなり細分化している。そのために夏休みなどに、農業高校や工業高校では、保護者も参加できる体験入学等の企画をやっていただいている。それにまず中学校の保護者に参加していただくことが大切ではないか。また、中学校の保護者は、実業高校は大学進学とは違うという意識を持っている。しかしそれぞれの学校では推薦枠などもあり、大学進学している場合も少なくない。高校側はそういう事ももっとPRしていく必要がある。</p> <p>話は変わるが総合学科の滑川総合高校があるが、生徒は関心を持って進学している。総合学科は大学に似た感じで、入学してから科目を選ぶことができる。それに惹かれていくのではないかという感じがする。工業高校や商業高校の場合でも、例えば工業高校では電気科、機械科があるが、中学3年の段階で本当にそれを選ぶのかということがあり、できれば総合学科のように一般教養部分があってそこで自分に向いていることを見つけてから機械に行く、電気に行くといったように多少柔軟性が出てくると、子供たちの意識も変わっていくのではないかと</p>
-----------	--

委員	<p>思う。</p> <p>専門学科を選んで入試を受けるという形だと、入ってみてこんなはずではなかったという生徒が結構多いのではないかと思う。そこを少しでも柔らかく持っていけると、工業高校に入っても自分なりに主体的に進路を選択できるという幅が出てくる。</p> <p>今いろいろ意見が出ているが、ごもっともだという点とちょっと認識が違うのではという点がある。</p> <p>まずは、専門高校もPR不足であるというご指摘があり、この点は反省しなければならない。しかし、専門高校も産業教育フェアなど、いろいろな取組は行っている。様々な場面で工業高校がいかに頑張っているかをアピールしているが、そこに中学生が足を運んで来てくれないという実態がある。いくら発信してもそこがうまく伝わらない。そこが我々の反省するところであるが、何もやらずに指をくわえているわけではないということは言っておきたい。</p> <p>これは言い過ぎかもしれないが、中学生に「とりあえず普通科」という傾向が強く感じられる。確かに中学校の段階で、こういう機械を扱いたいなどという具体的な希望はないかもしれない。しかし、何となくものづくりが好きだという生徒はいる。工業高校の入学生は、工業高校を選ぶことを自分で決めたという生徒が9割いる。また工業高校に進学させて良かったという保護者も9割もいる。工業高校は入学してからの満足度は高い。しかし、入る前の段階で良さをわかってもらえていない、というところをどう埋めていくかが課題である。</p> <p>一つの例だが、本校保護者からこんな話を聞いた。「うちの子はどうしても工業高校に進学したいと言っていたが、中学校の担任の先生からは工業高校に行ってどうするんだ普通科高校に行け、と言われた。塾の先生にも止めろと言われた。周りのみんなに止めろと言われたが本人がどうしても行きたいと言って進学したが、入学させてみて本当に良かった。」ということである。そういう保護者が一人でなく複数いる。要するに工業高校の実態を親御さんも学校も塾も理解していない。中学校の先生に工業高校に行けと言ってほしいわけではなく、工業高校ではこのようなことをやっているよと説明できるようにはなっていたきたい。</p> <p>先ほどの意見で、中学校の先生に足を運んでもらって見てもらわないと駄目だというのはある。今年度から中学校が進路指導の改善を目標にしていると聞いているが、高校側が来てもらおうとしても、週休日であるとか、出張として扱えないなど様々な理由で実際に来ていただくことが少ない。しかし、説明会に教員を10名も送りこんでくれた中学校や、さいたま市のように工業高校の見学を中学校の先生の初任者研修に取り入れているところもある。中学校と工業高校との連携を行っており、その広がり大きい。是非、他の中学校や市町村でもやって</p>
----	---

<p>委員</p>	<p>いただきたい。</p> <p>勤務校は専門学科の学校である。本校も中学生にPRしようとしているがなかなか伝わらない。ホームページなどでも情報発信しているが、実際に来てくれる人には限りがある。私が気になっているのは、専門学科の授業でも、2/3は普通科の授業と同じであるということが伝わっていないことである。工業科や商業科も2/3は普通科と同じであるが、生徒は普通科の授業ではモチベーションが上がらない傾向がある。職員も専門学科の職員とそれ以外の職員で意識の違いがあるように思うのでそこは改善しなくてはならない。</p> <p>中学生には、普通科と専門学科は授業の内容はそれほど変わらないということを理解してほしい。違うのは1/3だけであり、大部分は人間教育の根幹である最低限身に付けなければいけない基礎・基本の教育を受けている。そういった意識が浸透していない。専門学科の生徒は、専門の好きなことだけやればいいだろうという意識が強いと感じる。もっと中高が連携して、専門学科の期待できる部分、1/3の違いをうまく活用していきたい。</p>
<p>委員</p>	<p>資料3のNo.3にある公立高校の中途退学の理由で、14%が学業不振というのを見ると、高校に進みたかったけれど、入ってから勉強についていけずに辞めてしまうという生徒も多いのではないかと思う。</p> <p>特別支援学校では知的障害の生徒が急激に増えている。子供の数が減っているにもかかわらず、高等部はもちろんだが中等部でも増えている。これまでは通常の生活を送ることができていた軽度の生徒が、今は発達障害という名のもとに障害があるのではないかという見方をされるようになった。生徒数が急激に伸びている高等部については、これまでは高校に進学していたが辞めてしまったという生徒が、特別支援学校の高等部に進学しているからではないかと思う。</p> <p>特に、高等学園2校、分校3校、来年は職業科もある入間わかき高等学園ができるが、こういった学校は倍率が2倍を超えることもあり、毎年非常に高い倍率で入学選考が行われている状況である。</p> <p>また、高等部から生徒の層はかなり変わり、複雑な家庭環境の生徒も多い。小中高と上がっていく生徒もいるが、高等部から入るといふ生徒も非常に多く、中学校の特別支援学級からだけでなく、普通学級からも数多く入ってくる。前任校の高等学園では、1割を超える生徒が施設から通っていた。施設以外の生徒でも家庭環境が恵まれていない生徒が多い。児童養護施設の場合、入所できるのは15歳までで、高校に行っているという条件のもとに18歳まで在籍することができる。特別支援学校の高等部もそれに当たる。しかしどんなに頑張っても施設にいられるのは18歳までである。そのため、高校を卒業してからは就職させたい</p>

委員	<p>ということで、本人がわからないまま療育手帳を取らせ、100%企業就労を目標としている高等学園を受けさせて、3年後に就職させて施設から出していくという傾向もある。今問題になっている社会的な貧困家庭の問題の根幹もこの辺にあるのではないか。</p> <p>学力不振なのか、知的障害なのか線引きは難しいが、そのような生徒が特別支援学校の高等部に来ているのではないか。高校を選ぶのか、特別支援学校を選ぶのか、生徒にとってどちらが幸せかというのは一概には言えないが、中学校でも施設でも周りの大人がしっかり指導していかなければならない。どちらがいいということではなくて、結果として特別支援を選び生徒にとってそれが幸せならそれはそれで良いと思う。</p> <p>特別支援学校の進路状況の資料を見ても、高等部卒業後の進路が、施設・医療機関が減って就職が増えているので、高等部の教育が就職に繋がっているという点では評価できるのではないか。</p> <p>普通科高校にしても、専門高校にしても、総合学科高校にしても、特別支援学校にしても、生徒に進路実現をさせなければいけないことは共通である。こういった会議や学校でも、産業構造の変化という言葉が良く使われている。だが、産業構造が変化していくということを本当に認識している教師や生徒は、あまり多くはないのではないか。産業構造は変化するものだとして認識することはすごく大事であるが、それより大事なことはどういう風に変化していくのか予想を立てることである。産業構造はどのような変化をしていくのかと予想を立てる、考えることができる生徒の育成が、学校種にかかわらずこれからは大事なのではないか。</p> <p>今日の論点にも、普通科高校は「確かな学力や主体的に自己の進路を選択できる能力を身につけることが必要だ」、専門高校も「時代のニーズに合った人材育成のためにどのような方策が必要か」、と挙げられている。共通して言えるのは、いまさらドラッカーの「知識基盤社会」を持ち出すまでもないが、すべての基盤は「知識」であるということだと思う。</p> <p>第1回の会議でも、グローバル社会への対応、科学技術教育への対応について話し合われたが、結局、結論としては、どんな分野があっても汎用がきく、つまり汎用性が大事であるということであった。そのためには確かな学力を身につけることが必要であるということだ。</p> <p>埼玉県では、協調学習を始めとしてアクティブ・ラーニングを推進している。今日の論点は「県立学校の活性化・特色化」であるが、何か新しいことをやろうというよりも、産業構造の変化を予想することができるような知識や知恵を身につけるために、アクティブ・ラーニングを中心として確かな学力をしっかりと身に付けさせる、ということが埼玉県の特徴化になるのではないかと考えている。</p>
----	---

	<p>先ほど専門高校の話で、2 / 3は普通科の勉強をしているという話があったが、その2 / 3の教育をしっかりやるということが、汎用性のある確かな学力に繋がるのではないか。</p>
司会	<p>産業構造の変化に対応するという視点から、産業構造の変化を予想できる人材を育成する教育が大切ということか。</p>
委員	<p>夏休みに京都の堀川高校の探究科を見学に行ったが、そこでは汎用性を身に付けることに主眼を置いた授業が行われていた。これからはあらゆる学科で汎用性を身に付けることができるような取組を行わないといけないのではないか。</p> <p>外資が入ってくれば、産業構造の変化も読みにくく、対応もますます難しくなると思われる。生徒はよく安定した職業に就きたいと言っているが、これからは安定した職業というよりも、各自の能力を高めていき、いろいろな所に転職して上へ上へとステップアップしていくような時代になる。そういった能力が身に付けられる京都の堀川高校のような教育は、魅力があるといえる。</p>
委員	<p>企業側としても、優秀な人材の確保は企業の生命線なので、新しい経営の形を考えていけるような人材を学校で育てていただきたい。そのためには、枠にはまらない柔軟な考え方をを持った生徒を育てることが重要である。</p>
委員	<p>ものづくりが好きで工業高校の電気科に進学した知人のお子さんの話であるが、卒業後、3年間学んだ電気科への進学ではなく、建築学科を希望した。幸い優秀だったので指定校で建築学科へ進学することができた。その子は工業高校で電気科に進んだことによって、自分に合わないということがわかり、大学進学の際に自分が本当にやりたいと思った建築学科へと進学することができた。もし、普通科高校へ進学して、大学で電気科を選び、合わないから卒業後もう一度4年間建築科へ、ということになったら親としてはたまらない。</p> <p>本来は、専門高校へ進めば、電気科や機械科などで3年間変えずに勉強することが望ましいと思うが、電気や機械などいろいろなことを勉強して自分に合ったものを見つけることができるような柔軟なシステムがあれば、もっと早く自分に合うものが見つけられるのではないか。</p>
司会	<p>電気、機械など最初から決めるのではなくて、いろいろ試してみて自分に合うものを見つけるようなシステムが必要ではないかということか。</p>
委員	<p>中学生の段階で夏休みなどに普通科をはじめ、専門高校でも体験授業などを行</p>

<p>委員</p>	<p>ってもらえると良いと思う。また、今も学校見学会のようなものはあるが、普段の学校を一日体験できるようなものがあったら良いのではないか。さらに、中学校ではキャリア教育の一環として就労体験を行っているが、その高校版のようなものを行ってほしい。</p> <p>論点に「定時制高校にどのような支援体制が必要か」、「共生社会の実現に向けて発達障害を含む障害のある生徒たちの学習環境の整備に関してどのような取組が必要か」とあり、まずは教員の数を増やして欲しいが、定数の問題もあって難しいと思うのでサポートスタッフの常勤化を進めていただきたい。</p> <p>サポートスタッフとは、多文化共生推進員、学習サポーターなどである。この中で学習サポーターは大学生が務めることが多いので無理だと思うが、それ以外のものについては実態を知ってもらい常勤化していただきたい。</p> <p>定時制高校では、メンタルや身体、過去の学習歴、そして家庭環境に深い闇を抱えている生徒が多い。非常勤のスクール・カウンセラーやスクール・ソーシャルワーカーだと継続的な指導ができない。</p> <p>また、日本語を母国語としない生徒も大勢いる。それを非常勤のたった一人の多文化共生推進員で対応している。日本語を母国語としない生徒は、英語を母国語とする生徒もいるが、中国語や韓国語、ハンダ、タガログ語などいろいろな言語を母国語とする生徒もおり、それを一人の多文化共生推進員が見ているという非常に厳しい状況がある。それぞれの国の辞書もない。</p> <p>支援体制としては、スクール・カウンセラーやスクール・ソーシャルワーカー、多文化共生推進員の常勤化、それが難しいのであればその人数を増やしていただくことが最も緊急な支援体制である。</p>
<p>司会</p>	<p>多文化共生推進員の専門の言語は決まっているのか。</p>
<p>委員</p>	<p>決まっていないので、身振り手振りでコミュニケーションをとっているのが現状である。</p>
<p>委員</p>	<p>いろいろな県立学校がそれぞれ努力をしていただいていることはよくわかる。しかし、県立学校が担う範囲を考えないと経済的に厳しい家庭がたいへんになる。経済的に困難な家庭の生徒は、私学に進学することはできない。そのような生徒は県立学校が面倒をみななければならない。今ある学校を魅力ある学校にすることもそうだが、魅力ある学校を絞っていかないといけないだろう。統合していかないと、県立学校を目指している生徒や保護者のニーズにこたえられなくなる。公立学校は生徒の増加により、増やしていた時代があり、今はいろいろな学</p>

	<p>科やコースができています。それを元に戻すような形で考えていかないといけない。中学校も減っているので高校が減ることはやむを得ない。その中で県立学校の役割をしっかりと考えていかないといけない。</p>
司会	<p>ニーズをよく考えて学校を絞っていかないといけないというご意見をいただきました。</p>
委員	<p>共生社会の実現に向けて、発達障害を含む障害のある生徒たちの学習環境の整備に関してどのような取組が必要かについてだが、発達障害の生徒の中で知的障害の生徒は知的障害の特別支援学校という学習環境がある。また、発達障害がある生徒のうち、非常に学力が高い生徒もいる。例えば、学力の高い高校に在籍していて、他の生徒と様子が違うので調べてみたら発達障害だったという生徒や、大人になって生活しづらくなって気づく方も結構いる。そういった生徒は、学習環境として特別支援学校は適さないと思うので、その人の持つ力に応じた高校を進学先として選ばないといけない。しかし、そういった場合は学校生活に問題点が出てくるので、発達障害に詳しい大学の先生や特別支援学校のコーディネーターなどが高校へ定期的に様子を見に行くなどして、その生徒にどのような支援をすれば学校生活がしやすくなるか、社会生活へ巣立つことができるのかということをサポートする仕組みも必要である。</p>
委員	<p>企業に就職してからのコミュニケーション能力が非常に問題になっている。そのことによって業務に支障をきたしたり、会社から求められる役割を果たせなかったりしている。高校の段階でコミュニケーション能力の育成、特にアサーション・トレーニングを義務化し教育の一環として取り入れてもらえるとういのはないか。</p>
委員	<p>限られた財源の中で、どのように教育環境を整備していくかが論点として話し合われているが、生徒に汎用的な力をつけさせることは、柔軟な考え方を身に付けさせることにつながり、将来にわたっていろいろな選択ができる力をつけることになるだろう。また一方で、特色化した方が学校として魅力化できるとすると専門学科で2/3を普通科の学習としてそのまま学ぶのか、それともせつかく商業高校に入ったのだから、例えば英語も商業的な題材で学ぶことによって特色化でき、学びやすくなるのではないかと考えられる。そう考えると、学習内容のバランスをどうすることが良いのか難しいと思っている。</p> <p>汎用的な能力を身に付けさせるという意味では、先ほどの堀川高校の探究科の話であるとかアサーションであるとか、子供たちのコミュニケーションとか、あ</p>

るいは問題解決のプロセスを学ぶことができる機会があるといいというような考え方もある。これからの時代は、今の子供たちが50代くらいになるまでに、2, 3回転職することもあると予想されるので、汎用的な力を身に付けさせて中・高・大そして就職と進んでいく中で、選択を変えていくという経験を早めにさせていく必要がある。そのためには、汎用的な学習内容も入れていくというストーリーが成り立つ。

もう一つ考えなくてはならないのは、魅力ある学校と言った時に大人が目線どこに魅力を感じるのか、子供の目線ではどこに魅力を感じるのかは異なるということである。人間がどこに魅力を感じるかを考えると、数値よりも具体例や具体的なストーリーに説得されるという側面がある。高校に入学して、これしかできなかった生徒が3年間でここまでできるようになったというストーリーを生徒一人一人に持たせ、自信をつけさせることを埼玉県の県立学校の合言葉にして、どの学校に進学しても生徒が自信を持てるような学校づくりをしていくことが必要である。例えば、周りに反対されているが、機械が好きな生徒が機械を勉強できるところへ進学したいと思った時、工業高校の卒業生に自分の目標に当てはまるようなストーリーを持った先輩がいたら、進路を決める時の大きな参考になるだろう。そうすれば、偏差値が高い大学へ行った方が就職しやすく、良い人生が送れるという物差しだけではない判断ができるようになるので、そのようなものをつくっていけると良いのではないかと思う。

委員

汎用的な資質・能力と、特殊な知識・技能についての学習を単に1/3とか2/3で捉えるのではなくて、実際には個々の子供のニーズは違っており、明らかに将来の希望がはっきりとしている子供と、徐々に希望がはっきりとしてくる子供とに分かれている。前者については特殊な学習内容に特化したプログラムを提供し、そのための教育環境を充実させることが効果的な教育になる。具体的には、科学技術の分野なら理数科高校やスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けているような特色のある学校がそれにあたる。グローバルな分野については、例えば将来国連の職員になるなど国際的に活躍したいという希望がある子供については、その職につくために必要なことを学べる学校がよいであろう。いずれにしても大学への進学が前提であり、高度な専門教育を施すようなコースも必要である。

一方で専門高校に関しては、必ずしも大学に進学することが前提ではないし、また学校で得られる資格が将来のキャリアを保証することにつながる所以、そのニーズはこれからも変わらずあると思われる。そのことを踏まえ、適正数をよく考えて需要に対して定員が多いのであれば縮小することも必要だが、資格を取って卒業したいという生徒がいる以上、十分な定員を確保することも必要である。

委員	<p>また、将来のキャリアについてまだはっきりしない生徒には、汎用的な学習内容を強調したプログラムを行いながら、卒業時には大学進学ができるような力をつけつつ出会いも含めた教育環境を整えていくことが必要である。</p> <p>私も汎用性が必要であるという意見とまったく同じである。将来は、今の職業がなくなるといわれている時代である。そういった時代の中で汎用性は必要な資質であり、学び続ける力や意欲を持たせて卒業させたい。時代のニーズに合った人材育成ということだが、我々の先輩方の時代はお金もあり、学科転換をして新しい学科を作ってきた。そうやって時代のニーズに合わせた教育を行ってきた。しかし、限られた財源の中で取り組まなければならない今の時代は、専門高校にそれができない。今できることはカリキュラムではないか。カリキュラムを工夫して魅力を出し、時代のニーズに応じていかなければならない。そして、そのカリキュラムを展開する中で、何が必要かを考えていかないといけない。</p> <p>また、全体のバランスを考えて学校数を縮小していかなければならないことも事実である。工業高校の求人倍率は1.4から1.5倍あり、出口の部分は良く、いろいろな企業からもっと人材を送ってほしいと言われている。しかし、送り出すべき工業高校の生徒がいない。社会からのニーズはあるが、それに応える生徒が足りない現状である。では工業高校に来たいと思っている生徒がどれだけいるかという点については、入試倍率が1倍程度であり工業高校についてPRしきれていないことについて反省しなければならない。しかし、社会のニーズに応えるという点では、工業高校の定員を確保する必要がある。そのために、学校数で対応するのか募集定員で対応するのかという検討は必要である。昔は産業教育の振興費で予算が付いていたので、必要な設備を揃える資金があったが、廃止されてしまい簡単に揃えることができない。しかし、予算がないと言っても仕方がないので、ない中でどうするかを考えていかないといけない。</p> <p>定時制についてだが、戸田翔陽高校みたいな学校もあれば、大宮工業の定時制のような工業高校の定時制も3校ある。定員は埋まっていないが、以前と違うのは中学時代不登校だった生徒も入学している中、本校では全生徒の71%が皆勤、精勤で頑張っている。夏休みに補習に参加する生徒もいるし、大学へ進学する生徒も出てきている。このような学校を必要としている生徒は間違いなくいるが、人数がいない。それと同時に、昔のように働きながら学校へ行こうという生徒はほとんどいなくなっており、そのような役目は終わっているかもしれない。しかし、定時制をなくすわけにはいかないので、戸田翔陽高校のような定時制の高校をつくった方がいいかもしれない。また、定時制と全日制の併置校では、全日制は5時に施設設備を定時制に引き渡さないといけない。全日制の工業高校の生徒の中には、いろいろなことに前向きに取り組みたいと考えている生徒がいる</p>
----	---

委員	<p>が、5時で止めなくてはならない。せっかくの生徒の意欲をそいでしまうことになる。両方をうまく運営するためには、定時制を独立させることも考えないといけない。</p> <p>発達障害の生徒についてだが、高校にも増えてきている。特別支援学校でも年間で研修を行い、そういった生徒への対応を研究している。工業高校は提出物が厳しく、レポートを出すか出さないかで成績が大きく変わる。出せない理由が障害によるものなのかどうかについて、教員の研修や意識改革を進める必要がある。このような生徒への対応は、特別支援学校だけが考えることではなくて、全ての学校で考えていかないとけない。</p> <p>県立学校を生徒や保護者のニーズにこたえられるよう、魅力ある学校に絞って統合することはやむを得ないという意見は、大きな問題として考えていかなければならない。また、学級減で対応するのか学校を組み合わせで対応するのかという意見については、活力ある学校規模を考慮しながら費用対効果の面からも考えなければならないので、厳しいが検討せざるを得ないだろう。SSHやSGHが専門高校的になれば、才能教育に道が開かれるような気もするが、現状は伝統的な進学実績のある普通科高校が対象になって行っている。そのような学校では、普通科の授業を行った上にSSHやSGHの学習にも取り組んでいるので、負担が大きいという問題を抱えている。そう考えると、これからは選択と集中で考えていかないとけない。汎用性を重視した教育をという話も出ているが、そういった点を考え、パイロットスクールのような学校を作るとよいのではないか。アクティブ・ラーニングを進めていく中でいくつかの障害があり、一つは教えている教員が一斉授業体験者であること、さらにはアクティブ・ラーニングが進んでいる欧米に対して、クラスの生徒数に決定的な違いがあることである。本校でも「未来を拓く『学び』プロジェクト」の公開授業を行っているが、1クラス40人を超える生徒がおり、アクティブ・ラーニングの展開や効果にも限界がある。奈良県や大阪府、千葉県でも教育コースの高校があり、そこに費用を集中させ、例えば電子黒板やプロジェクターなどを整備している。埼玉県ではプロジェクターを再編整備校などに整備して活用しきれない現状があるため、より活用できる学校に整備していただきたい。本校にも端末が40台追加されたが、まずは使いこなせる学校に整備してから周りの学校に広めていくのがよいだろう。つまり、これからの教育を担いアクティブ・ラーニングなどを実施できるよう、場合によっては1学級30名や35名くらいの少人数で効果を試す学校を作ってほしい。埼玉大学に付属高校は無いので、県立学校の中にパイロット校のような学校を作って、アクティブ・ラーニングで育った子が、将来的には教員となって学校に戻ってくるような流れを作っていく必要があると思う。</p>
----	--

委員	<p>先ほどの多様な生徒への対応の話の中に、戸田翔陽高校のような学校を作るべきである、あるいは特別支援学校でない学校に発達障害の生徒が入学してきている状況があるということがあった。学校生活が難しくなっている生徒も出てきている中でスクール・ソーシャルワーカーの話も出た。スクール・ソーシャルワーカーの配置については、東京よりも埼玉の方が進んでいる。情報提供になるが、先日東京都教育委員会が本校のスクール・ソーシャルワーカーの活用についてヒアリングに来校した。東京都では、来年度以降スクール・ソーシャルワーカーの配置をもっと充実させようと考えているとのことである。また、東京都のスクール・ソーシャルワーカーの時給は、埼玉県より高くなっている。東京都のスクール・ソーシャルワーカーは埼玉在住の方が多そうなので、東京都が本腰を入れだすと埼玉県で働いているスクール・ソーシャルワーカーの方は東京に流れていってしまうかもしれない。先ほどの支援体制の整備の話につながるので、対応を考えていただきたい。</p>
----	---

司会	<p>いろいろと他にもご意見はあるかもしれないが、時間の都合もあるので、次の論点に移りたい。次の論点について、事務局から説明願います。</p>
事務局	<p>(資料2「魅力ある県立学校づくりについて」のうち、「各学校の活性化・特色化方針の明確化」と「中高が連携した進路指導」について説明)</p>
委員	<p>参考データの中ですごく不安になったのは、「勉強に関する意識について」の「勉強は好きですか」の質問に対して、中学3年生の半分以上が好きではないと答えていることである。では、なぜこのように勉強が嫌いになったのかと考えると、勉強というイメージ、つまり勉強が伝達情報になってしまっているのではないかと思う。先ほどから出ている汎用性は、ばらばらな知識を一つに統合して使うことができる力である。働いたときに、各教科で学んだ知識を一つにまとめて使うということが仕事を生み出す力である。その力を高校で付けておかないと、大学へ行ってからそういった力はつかないと思っている。その力を身に付けさせるために一番なのは、自己表現させることである。まず、自分で何かについて自己表現させ、それをメタ認知することによって新たな心理表象、心象、つまり創造の骨格の映像を思い描くことができる。それがものづくり国の根幹であり、この数値は全てのことにつながるものであらうと懸念している。その辺の払しょくから行わないと、この国が危ないのではないかと危惧している。</p>

委員	<p>私がデータの中で一番心配なのは「自分の将来について」の「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対して、学年が上がるにつれて持っているという生徒が減っているということである。「勉強が好き」かどうかと同じようなことだと思うが、現在の生徒の状況を反映しているデータである。中学校の間に勉強の意味が分からなくなってくる。自分の夢も分からなくなってくる。それで勉強から遠ざかっていく。そして、将来の目的がはっきりしないまま高校に進学していく。そういう状況が、高校在学中の学校不適応や中途退学につながっていく背景ではないかと思っている。なぜかを考えると、中学校の日々の教育が高校進学のための試験勉強になっていることに大きく影響を受けており、弊害になっているのではないかと。試験勉強は、自分が十分にできたと思える生徒はごくわずかで、逆にできなかったと自信を砕かれるようなことが非常に多い。日本の教育の場合、受験をはじめ繰り返しの試験の中で、子供たちは自信を失っていく。試験を重視する風潮というのは改めなければ、一番大切な将来の何に向かって勉強するのかという意識が育たない。だからこそ、中学校3年間で夢や目標を育むことができるような教育を最優先に行っていく必要がある。勉強とは、そのためのツールであり、目的意識を持って取り組んでいくことが大切である。「勉強が好き」かどうかに対して、「勉強は大切」であると思う生徒の割合は下がっていないので、勉強は必要なものと前向きにとらえて、夢や目標をきちんと持って卒業させていくことが大切ではないかと思う。</p>
委員	<p>中学生は、「勉強が大切である」ということは十分に自覚しているが、「勉強が楽しいか」というと学年が上がるにつれてだんだん楽しくなくなるという現状がある。それは、保護者の期待もあるし、学年が上がるにつれてテストの結果についていろいろな場面で、いろいろな人から言われるようになる。アクティブ・ラーニングなどの授業改善も図っているが、教科ごとに個別の授業を見てみると生徒につまらないと思われる授業は、成績も伸ばせていないことがわかる。教員の授業の質を変え楽しい授業を行えば、勉強が好きになる。勉強に関しては、教材も大切だが、教える側の指導力の問題が大きいのではないかと実感している。そこを改善していかないと、中学校3年生の「勉強が好き」という数値は上がっていかない。そして学力もなかなか上がらず、夢も抱けない状態になってしまう。根本のところは、楽しく授業を受けられるかどうかの質の部分であり、その方法を改善していくことが今一番必要なことではないか。</p>
委員	<p>先ほどの意見の通りだと思うが、「勉強が好き」と答える生徒とテストの結果について考えてみると、楽しい授業を受けて「勉強が好き」と答えている子供の学力は高い。当然だが、授業が楽しいと思えば授業を好きになり、授業が好きな</p>

	<p>らばテスト結果も良くなる。また同時に、中学校は高校入試を目指して勉強しており、入試問題ができるよう授業改善について中学校長会や小学校校長会でも指導している。全体的に見ると、「勉強が好き」と答える子供は結構多いのではないかと。どういう子供が「勉強が好き」と答えるかを考えて結果を見ないといけなないので、すべての子供たちが「勉強が好き」と答えるとしたら、その方がおかしいのではないかと思う。</p>
委員	<p>勉強を好きにさせるという意識から違うと思っている。何のために勉強をするのかについて伝えることが大切である。一人一人の生まれてきた意味であるとか社会で活躍すべき役割、企業の優劣などに関係なく一人一人が大切な人間で、みんなが社会の構成員であり何らかの役割を担っているのだということをご家庭でも教えていただきたい。このことを教員から保護者にコミュニケーションをとって伝え、三位一体となって共有して進んで行くことが、意識の改革に大切なのではないかと思う。</p>
委員	<p>先日、心臓外科の天野篤さんが講演で「人のため、世のために役に立て」と生徒におっしゃっていた。また、ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智先生もまったく同じことをおっしゃっていた。生徒を学習に向かせる動機づけとしては、夢を追いかける自己実現を果たすためという考え方がある。しかし、自分のためだけだと、人間は長続きしない。人のため世のためという社会貢献としての意識が合体した時に、志になるのではないかと。高校段階では、そのような志をいかに育てるかという働きかけをすることが大切である。やり方の一つとしては、先ほど委員がおっしゃったように、各自のストーリーを描かせるということである。それは、学校段階で言うとロールモデルを示していくということになる。高校生が中学校に呼ばれて、進路説明会等で中学生に話をする機会がある。これは高校でも大学生を呼んで話を聞くのと同じで、先輩の話を聞いて自分の将来をイメージさせるものである。さらに今本校で取り組んでいるのは、社会に出てからのロールモデルを示すというものである。中学校でも高校を選ぶため、先輩の高校生に話をさせているのだと思うが、その先の社会に出て活躍している人の話も聞かせると、将来のストーリーを描きやすくなるのではないかと。</p>
委員	<p>進学した学校のその先を考えることが大切であるという話に非常に共感した。</p> <p>一つ目は、高校、大学入試や就職試験でも、それを突破したことではなく、3年後に何をしているかという持続性を見るような指標を取り入れていけると良いのではないかと。具体的にいうと、日本では全体的に中学生が精いっぱい力を出して高校入試を突破すると、疲れてしまうという傾向がみられる。高校や</p>

委員	<p>大学に入ってから活躍できる力が、どれだけあるかについて評価できるものを取り入れられると良いのではないか。</p> <p>二つ目は、魅力ある学校づくりのために、小・中・高ともキャリア教育にてこ入れして、魅力あるキャリア教育を進めていただきたい。キャリア教育というと、夢から逆算して就職や大学進学するために高校を選ぶことになってしまっているが、私は算数や理科が好きだからこの中学校に行こうとか、中学校で好きな教科があり、そういう先輩はどこかの高校に行っているかなどの目線がない気がする。そのような教育ができれば良いのではないか。その教科が好きか得意かを聞いて、それがどの高校につながっているか伝えられるとよい。勉強が好きではない生徒が多いという結果が出ているが、勉強が嫌いだと専門高校に行くということになっては悲しいので、学校では生徒の夢が見えてきたら、それを活かして先に進めるような指導ができるようにしたい。</p> <p>三つ目は、進路の多様性を評価する観点があっても良いのではないか。例えば進学校であっても、単に東大に何割進学できてよかったではなく、どれだけ自らの希望に基づいて多様な国立大学に進学したか、有名な国立大学だけでなく地方の大学などにどれくらい進学できているかなど多様性を評価する観点を学校の強みとして評価する指標とできるのではないか。</p> <p>勉強が好きな生徒は少ないが、大切と思っている意識は高いようなので、結果的には取り組んでいくということになるのだろう。本校でも家庭学習をやっている生徒は15～18%くらいなので、学習習慣をつけていかなければならない。高校の活性化・特色化についてだが、どうしてもグローバル化というと世界をリードするような人材育成は進学校でという考え方がある。しかし、専門高校には専門高校なりのグローバル化がある。工業高校の卒業生では、東南アジア地域との仕事なども増えているので、様々な教育の観点からグローバル化を捉えていく必要がある。同様に、キャリア教育は専門高校の役割だと思われるが、特に中堅の普通高校でもキャリア教育に取り組まなければならない。また、中高連携についてだが、専門高校の校長として中学生やその保護者の方々にいろいろなPRをしたつもりだが、結果として伝わっていないことは反省しなければならない。先週の工業校長会において、どうやって工業高校の良さを知ってもらうかについて議論したが、やはり中学校の先生に工業高校に来ていただきたいという意見が多かった。ではそのためにどうするか、というところで行き詰ってしまった。前提として我々高校側も努力をしていかないといけないということはあるが、専門高校がこうしてくれれば、中学校の先生は足を運ぶことができるという具体的な意見を中学校側に聞いて教えてもらえるとありがたい。</p>
----	---

委員	<p>今日の論点に共通するのは、県立学校の取組について周知不足であるということである。各県立学校は、まだ足りない部分はあるがそれぞれ活性化・特色化に取り組んでいる。資料にある論点の表現を見ると「十分に周知することが必要だ」など、結局は周知されていないことが一番の問題となっている。したがって、現在各県立学校が行っている活性化・特色化の取組を周知すれば、今回のテーマについては多少なりとも解決に近づくのではないか。</p> <p>そこで県への要望だが、教育局に広聴・広報担当があるが、各学校からのニュース提供をいつも待っている状況である。基本的には県立学校ニュースの記事を待っているの、各学校におけるホームページや学校通信で中高連携などについてPRすることには限界がある。民間企業では広報部があり、埼玉県でも知事部局には、50人から60人規模の広聴広報課という大きな組織がある。テレビ・ラジオ、情報発信、ウェブ管理や広報などの担当に人数が割り当てられており、情報を待つのではなく取材に出かけている。そのようなことができる組織を教育局にも設置して、待っているのではなく毎日のように各県立学校に取材に出向いていただきたい。そして、広報を各県立学校に任せるのではなく、県立学校のことならこのサイトを見ればすべてわかるというようなものを作っていただきたい。例えば、大宮工業高校で今日はこういったイベントをやっているとか戸田翔陽高校ではこんなことをやっているなどという情報を発信し、終了後にはたくさんの方が来て盛況でしたというような記事を掲載する。そのサイトを見れば入学者選抜情報も含め、県立学校の楽しそうな雰囲気や、新しい情報が常に更新されているものにしてほしい。そうなれば、中学生だけでなく他の県立学校の先生方も貴重な情報源となり、参考にし合えるのではないか。当然、各学校はこれからも県立学校ニュースに掲載できるような情報も提供するし、活性化・特色化の努力もしていくが、それを各学校にだけ任せるのではなく、組織的な広報部などにおいて広報活動をお願いしたい。</p>
委員	<p>広報活動が重要であることについて、本当にその通りだと思う。企業でも生き残るために何をやるかについて勉強会を開くが、独自性をブランド化してそれを可視化することが大切であるということを研修している。まさに学校経営も同じであると思う。</p>
委員	<p>生徒に夢を持たせるためにロールモデルをという話についてであるが、本校は、幼稚部、小学部、中学部、高等部さらには専攻科まであるので3歳から18歳までの生徒がいる。教職員124名中16名が聴覚障害者であり、子供たちにとっては頑張れば学校の先生になれるという目の前にいるロールモデルとなっている。教員以外では、聴覚障害があるが社会で活躍している方々を招き講演を</p>

	<p>していただいている。毎日接している教員や講演で来てくれる方々から、生徒たちは自分たちの将来に対する夢や希望を与えてもらっているので、大切なことだと思っている。特別支援学校から進学している生徒は、聴覚障害者が多くを占めているが、大学へ進学して教員になって戻ってくる卒業生もいるので、ある面では聴覚障害というマイナスな面からの出発だが、自信を持たせて夢を持って卒業させてあげたいという思いが強い。</p>
委員	<p>進路の意識を高めるのと同時に、それをどう保証するかという点で入学者選抜の基準を進路の方向性とうまく合致するようにしていく必要がある。要するに、試験の成績が100のうち90などとかなり高い割合で選抜試験の合否が決まる形だと、夢をあきらめる生徒が多くなってしまいうだろう。人が社会で活躍していくときに、それを応援する立場から考えると、より一人一人に合った進路選抜の在り方について、すぐには難しいと思うが改善する必要があるのではないか。</p>
委員	<p>保護者の立場から、進路選択の際一番重視することは自分の学力にあっているかどうかということである。となると受検するときに偏差値によって学校を決めることが多いが、偏差値の高い浦和や大宮があり、越谷北や不動岡となる。男子の場合は春日部があるが、女子ではその間に県立高校がないから私立高校へ行かせようという流れがある。私立高校は、単願制度により早く決まるというメリットもあるのでそうなることもある。学力面において、県立高校がバランスよくあるとよいのではないか。</p>
司会	<p>これまで話があったように、入試の成績だけでなく、それぞれの学校の特徴を出していけば、そのような生徒も行きたい学校があるのかもしれない。それではそろそろ時間なので、本日の協議はここまでとします。ありがとうございました。</p>